

【河川環境】川が川をつくる

目標：水辺にワンドやたまりが数多く存在し、水位の変動によって冠水・攪乱される区域が広範囲に存在し、変化に富んだ地形と固有種を含む多様な生態系が残されていた頃の河川環境を目指す。

生物の生息・生育・繁殖空間を保全・再生するため、「川が川をつくる」ことを手伝うとの認識で、自然が再生するきっかけをつくるために人が少しだけ手伝い、しばらく回復の様子をモニタリングして、必要に応じて、また少し手伝うといった順応的に対応することとし、河川や湖の徹底した連続性の確保を図る。

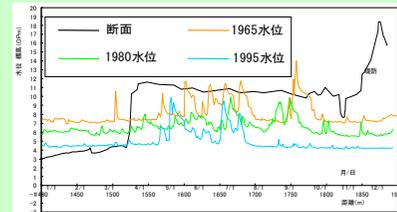
現状の課題

水辺のワンドやたまりの減少

昭和30年代までは淀川のワンドやたまりが多数形成されていたが、近年の河川改修によりその多くが失われた。



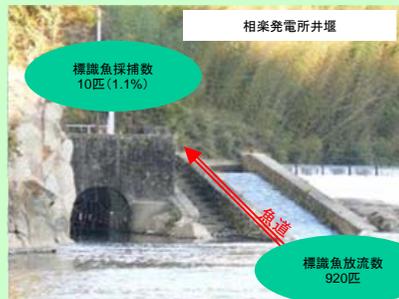
砂利採取等に伴う河床低下により、高水敷の冠水頻度が減少し、貴重なヨシ原に影響。



高水敷の冠水頻度の変化

縦断方向の不連続

ダム・堰等の河川横断工作物により縦断方向(山～湖・川～海)にも不連続になっている



・下流副堰堤が低く、魚類が堰直下に入っている。
・魚道通水期間が原則4～7月に限定されている。

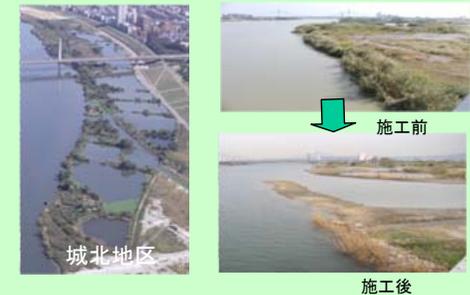
整備内容

徹底した連続性の確保

横断方向の河川形状の修復

河川敷から水辺への形状をなだらかに切り下げ、水際の改善等を行う。

高水敷の切り下げにより、多様な魚介類の生息場となっている淀川のワンド・たまりを保全・再生する。



高水敷の切り下げにより、冠水頻度の減少に伴い陸化した鶺鴒のヨシ原を再生する。



縦断方向の河川形状の修復

魚類等の遡上や降下が容易にできるよう、既設の河川横断工作物(堰・落差工)について、効用や効果・影響を点検し、撤去や構造の見直しなど改良方策を検討する。

イタセンバラに代表される在来魚の環境保全・再生

- ①淀川本川の自然の水位変動が起こっている上流域において、現在あるワンドを10年間で倍増する。(ワンド倍増)
- ②木津川地区で、現在あるたまりを周辺の樹木の伐採等により保全し、地形等を十分に精査し、以前確認されていた場所、河川の状況を踏まえ新たな場所において、たまりを整備する。

【河川環境】ダイナミズムの再生

目標: 水辺にワンドやたまりが数多く存在し、水位の変動によって冠水・攪乱される区域が広範囲に存在し、変化に富んだ地形と固有種を含む多様な生態系が残されていた頃の河川環境を目指す。

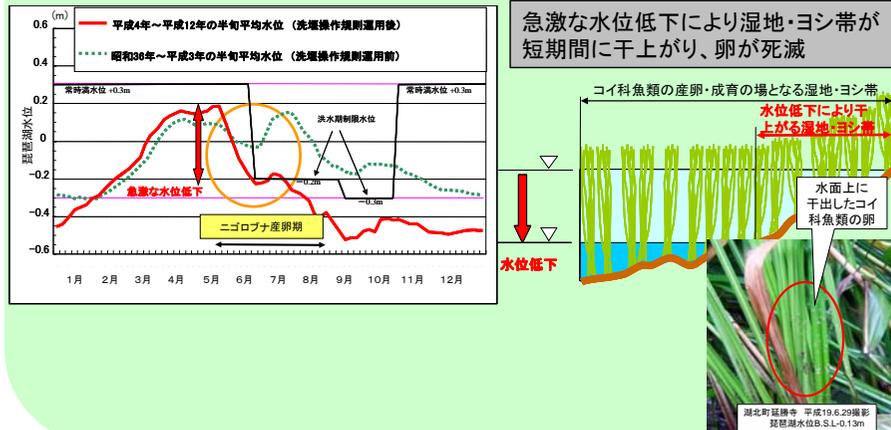
河川における水辺のワンドやたまり、琵琶湖沿岸の水陸移行帯など、水位の変動によって冠水・攪乱される生物の生息・生育・繁殖空間を保全・再生するため、治水への影響や水需要の抑制をふまえた利水への影響を考慮した上で、自然の水位変動リズムに近い操作方法を確立するため淀川大堰や瀬田川洗堰等の運用を検討する。

現状の課題

水位変動パターンの変化

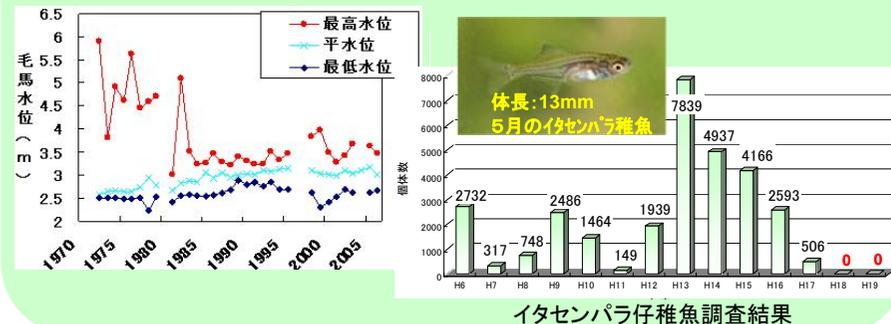
瀬田川洗堰

利水、治水のため人為的に琵琶湖の水位を下げることによって、季節的な水位変動パターンが変化し、魚類の産卵・成育空間に影響を与えていると指摘されています。



淀川大堰

淀川大堰の湛水上流部では、淀川大堰建設前と比較して出水時の水位変動が小さくなっており、城北地区では、平成18、19年の仔稚魚調査ではイタセンバラの生息が確認されず、生息が危機的状況にある。



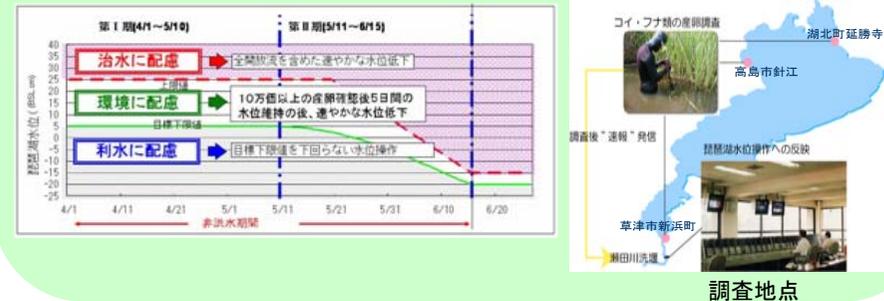
自然の水位変動リズムを踏まえた試行操作

瀬田川洗堰

瀬田川洗堰において、治水・利水・環境の調和のとれた弾力的な操作方法を確立する。

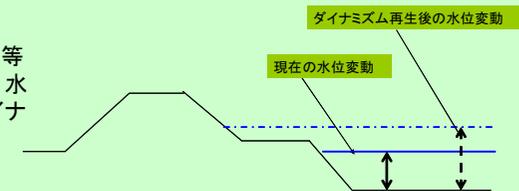
平成19年度瀬田川洗堰試行操作

- ①4月～8月において日々の産卵量を調査代表3地点(草津市新浜、高島市針江、湖北町延勝寺)のいずれかの地点で計測する。
- ②調査地点で10万個以上の産卵が計測された日を「大産卵日」とし、その翌日から5日間は水位を維持する。



淀川大堰

治水利水を考慮した上で、ダム・堰等の運用について検討することにより、水位変動や攪乱の増大を図り川のダイナミズムの再生を図る。



取水施設を改良することにより、大堰設置以前の水位であるO.P.+2.5m程度に低くし、自然の水位変動に近づけるべく、水位操作を試行し操作方法を確立する。

